

喫茶去

きつ さ こ
喫茶去

じょうしゅうろく
(『趙州録』)



こよみ
はや、九月になりました。暦の上だけではなく、朝夕、おりにふれ、秋の気配を感じるこの頃でございます。さて、今回の禅語は、とても有名なものです。

じょうしゅう じょうしゅうじゅうしん
趙州和尚(趙州從諗:778-897)は、はじめて訪ねて来た修行僧(新到)に尋ねます。

かっ すかん いた
趙州:曾って此間に到るや(以前にも、ここに来たことはあるかな)?

かっ いた
僧:曾って到る(来たことがございます)。

きつ さ こ
趙州:喫茶去(そうかな、それでは、お茶でもおあがり)。

また、あるときには、訪ねて来た別の修行僧に尋ねました。

かっ いた
趙州:曾って到るや(以前に、来たことはあるかな)?

かっ いた
僧:曾って到らず(いいえ、来たことはございません)。

きつ さ こ
趙州:喫茶去(そうかな、ならば、お茶でもおあがり)。

いんじゅ
この様子を見ていたお寺の主(院主)が、趙州和尚に尋ねます...

なん かっ いた かっ いた きつ さ こ
院主:甚麼としてか、曾って到るも、曾って到らざるにも喫茶去と云う(和尚さん、和尚さんはどうして、来たことがある人にも、はじめて来た人にも、お茶でもおあがり、というのですか)?

すると、趙州は、「院主さん!」と声を掛けます...

院主は答えます...「はいっ!」

きつ さ こ
趙州:喫茶去(お茶でもおあがり、...)。

きつ さ こ
喫茶去...「去」は、「去る」という意味ではなく、意味を強めるための「助字」です。ですから「喫茶去」は、「まあ、お茶でも一服おあがりなさい!」というぐらいの意味になるのです。

いにしえ

古の禪の修行僧たちは、道を求め、師を尋ね、旅の暮らしを続けました... その生き様、修行の様子は、行く雲の如く、流れる水の如く... どこにもとどまることなく、ひたすら旅を続ける... だから、修行僧のことを「雲水」と呼ぶのです。

そして、修行の場を見つけたならば、まずはその道場を指導しているお師匠様にお目に掛かるのです。

修行僧は、その道場の指導者がどれほどの人であるのか... 自分の一生の師匠としてついていべき人なのかどうか... そういったことを、この最初の顔合わせの時に、鋭く見抜きます...

反対に、道場の指導者は、自分のもとにやってきた旅の僧が、どこまで修行が進んでいるのかを、しっかりと見極めます。

趙州和尚と、修行僧との問答には、こうした背景があります。何気ないように見えるこの問答は、真剣勝負の現場なのです。

さて、そのような重大な問答の現場において、趙州和尚の振る舞いはといえば、ただ「お茶でもおあがり...」というものです。はじめての新人入りも、経験豊かな歴戦の強者も、同じです... 誰に対しても、まったく同じようにお茶をふるまう趙州和尚に、その理由を尋ねたお寺の院長さんにも、ただ「お茶でもおあがり...」なのです。

この問答の中で、趙州和尚は、とても大切なことをわたしたちに教えてくれています。その大切なこととは、「無心」ということです。

機械的に、判で押したように、決められたことをしているのではないのです。心の構えをすべて取り払い、相手が誰であるのか... それすらもお構いなしに、心を開いて、ただ、無心に向き合っているのです。

心の垣根をすべて取り払い、無心に、心の赴くままに相手に向き合う時、相手が誰であっても、何を為すべきか、どうふるまうべきは、自然にわかります。そして、それさえちゃんとわかっているならば、同じようにお茶をふるまっても、いっぱいのお茶は、その相手のためだけの、いっぱいきりの特別なお茶になるのです。そしてそれこそが、「一期一会」のお茶なのです。

